No. 1

(8)

寺田君

岡田武松（談話筆記）

寺田君は船が嫌ひで、土佐へ帰る時でも天氣が悪くなりはせんかと心配して神戸の気象台へ電話を頼んで行った。其の手で土佐へ帰られた。その船嫌ひな寺田先生がどうして海洋学をやったかと私共時々考へた。明治四十三年に寺田さんが地球物理学（講義）を担当する事になって earth crust などをやられた。其の頃の學生が藤原博士だった。講義は一年海洋学をやれば一年は氣象学と云ふ風であったが、それから海の方にはいられたものと思ふ。寺田さんの研究に大抵波動と云ふものはいって居ないものはない。波動ならざるはなしと云ってもよい。波動から海洋学にはいって行かれた。波動から海がすきになったのだろう。

H形 イーグル印原稿紙
12×25

地球物理学の研究で独乙に留学されるとき私に後をやつて呉れと云はれたが海はどうしたと云ふ譯で気象だけ留学中後任を続けて居たわけでした。帰朝してから本格的に気象と海洋をやられた。寺田さんは帰つて来てから海の事ももう少し盛んにせねばいかんと云ふので金も無い官協議会の測候あつた時十日間ばかり海洋学の講義をされた。田丸先生から其れを基として ローマ字会の財源にしたいと云ふので私が頼んでやつて貰つた。其の本は・あとで気象台の方でも澤山買つた。Rudgki の Physik der Erde の海洋の部があの中に大部織り込まれて居る。私が初め「海と空」にかいた面白い話がある。銚子の測候所で験潮儀を作ると云ふので私が寺田さんに紹介し銚子の川口のさきの岩の所に設備された。

H形 イーグル印原稿紙

暫らくたつて験潮儀の記象のさきん変な波が現れる。不思議でどうしも分らぬ。書きはなしと云ふ現象でしないらしい。分らぬ、[illegible]先に角井戸をかへて見ようと云ふので、かへて見る中に消かは、つて居つて験潮儀の中につかまつて居た。

又地球物理の用で柿岡の磁気観測所へ出かける時、元はひどい道で人力車などひつくりかへり相になる道だつた。寺田さんが下りるくと云ふと東夫は いや旦那なんとも有りませんと云つて又一層早く駆け出す始末。先生上で御念仏唱へて居たといふ。これをこつそり書いたら寺田さんはすつかり参つた。

昨年坪井さんの外遊を東京駅に送つた時、先生はくの字になつて歩いて居る。どうしたいと云ふと病気になつてね、又君に書かれると困るからねと笑つて居られた。

H形 イーグル印原稿箋